

海外事務所
だより

イギリス上院改革白書および 改革の流れ

ロンドン事務所所長補佐

藤野

健(東京都派遣)

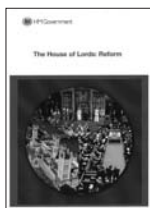
ロンドン事務所

はじめに

二〇〇七年二月七日、イギリス政府は「上院改革白書(White Paper, The House of Lords: Reform)」を発表しました。第一次政権に向けての「マニフェスト」に「The House of Lords must be reformed.(上院は改革されねばならない)」を盛り込み、改革に取り組んできたブレア政権の最後の総仕上げとして耳目を集めています。

提言されている改革案の骨子は、上院議員の選出に一部直接選挙制を導入し、現在終身制の任期を一年とするなどで、実現すれば長い伝統を誇るイギリスの議会制度が大きく様変わりすることになります。本稿では、イギリスの議会における上院の権限・役割などをあらためてご説明しつつ、今回の改革に至るまでの流れなどと合わせて白書の内容をご紹介します。

ところで、イギリスにおいて「白書(White Paper)」とは、日本の「年次報告書」ではなく、政府の具体的政策提案を総合的見地から発表するものであることにご留意下さい。



↑上院改革白書

上院について

世界最古の議会制民主主義国家であるイギリスで、その根幹を成す議会の起源は中世にまでさかのぼります。アングロサクソン時代と呼ばれた一二世紀ごろ、当時の国王によって招集された封建領主と大司教による賢人会議に端を発すると言われています。それが一二世紀ごろには国会(Parliament)と呼ばれるようになります。ちなみに、「この“Parliament”という言葉は、

古フランス語の“Parliament”(議論する) + “ment”(場所)が語源になっているようです。

当初は税金の額を決定するための議論を行う場として存在した国会は、一五世紀には法律の提出権を持つようになり、さらに一七世紀には立法院として王権に優越する力を認められ、現在に至っています。

以上のように長い歴史を持つイギリス議会ですが、一四世紀ごろに、貴族階級によって構成される上院(House of Lords)、貴族院と訳されることもある)と市民代表からなる下院(House of Commons、庶民院と訳されることもある)の二院制が成立しています。以下では、下院との違いに触れつつ、上院の現在の姿について、ご説明したいと思います。

イギリス上院の最大の特徴は、定数がないこと、および構成員が選挙で選ばれていないことでしょう。上院議員となっているの



↑テムズ川から眺める国会議事堂

ます(表1参照)。これに対して、下院は任期五年、定数六五九人で、小選挙区制で選出されます。

上下院の立法府としての機能は基本的に同一ですが、その手続きや権限の上で違いが見られます。ここでは、権限についてのみ触れますと、まず、下院が承認した予算関連法案については、上院の承認は必要ありません。そのほか、下院が承認した一般法案は、上院で否決されても、一年たてば上院の承認なしに立法化できるなどの点で、下院の優越が図られています。

また、もう一つのの上院の大きな特徴は、最高裁判所としての機能も果たしていることです。ロード・チャンセラ―(the Lord Chancellor)と呼ばれる上院

表1:上院の議員数(政党別) (2007年3月1日現在)

政党	一代貴族	世襲貴族	聖職貴族	合計
保守党	156	47	0	203
労働党	207	4	0	211
自民党	72	5	0	77
無所属	169	33	0	202
聖職者	0	0	26	26
その他	10	2	0	12
合計	614	91	26	731

(注) leave of absence の13人を除く

は、一代貴族、世襲貴族、聖職貴族等と呼ばれる貴族たちであり、任期は終身です。二〇〇七年三月一日現在で七三一人の議員が議席を有しています

上院改革の流れ

議長は、最高裁長官の役割も果たし、法曹貴族(二代貴族の中に数えられる)と呼ばれる二六人とともに裁判を担当します。ただし、二〇〇五年の憲法改革法により、この機能ははく奪されることとなりました。二〇〇九年に、独立した最高裁判所が創設され、法曹貴族が移転することをもってこの機能は消失します。

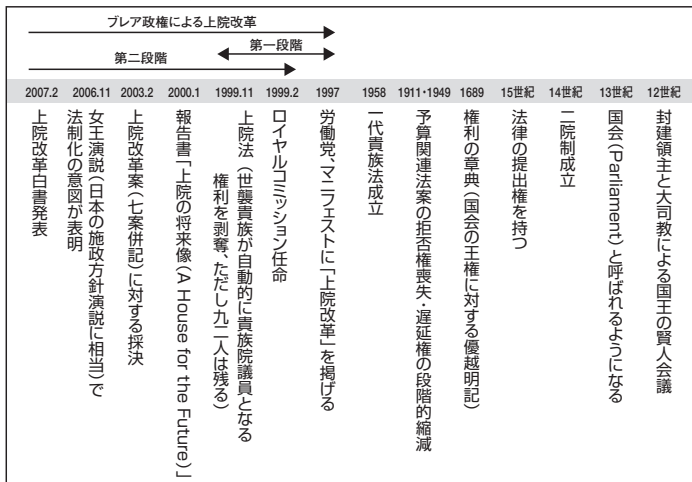


↑議場の様子

実は、上院の改革が論議されたのは今回が初めてのことではありません。上院の改革は一〇〇年以上にわたってイギリス議会の課題でした。

貴族院と訳されることもある上院の構成員は、先に触れたとおり、選挙で選ばれていない貴族たちです。その内訳は、世俗の貴族と英国国教会の大主教などの聖職貴族です。世俗の貴族はさらに世襲制の貴族と一代限りの貴族があります。かつて、世襲制の貴族は二一歳になると自動的に上院の議員となるというのが伝統でした。つまり、貴族という身分と上院議員という資格が直結していたのです。一九五八年に一代貴族法が成立して、一代限りの貴族という新しい身分が発生してからも、貴族上院議員という構図は変わりませんでした

表2:イギリス議会の成り立ちと上院改革の流れ



が、その性格は大きく様変わりします。一代貴族に任命されるのは、一般には、業績を残した政治家や公務員などであり、それにより上院に広範な職業と経歴を持つ男女が取り込まれることになったのです。次に、権限面では、一九一一年と一九四九年の議会法によって、上院は予算関連法案の拒否権を奪われ、遅延権も段階的に縮減されるなどして、改革が行われてきたのです。一九九七年に政権の座についた労働党は、ブレア政権を樹立すると同時に、上院をより民主的に、より代表性を強調するために、二段階に分けて改革を行うことを決

めました。第一段階では上院における世襲貴族の議席と投票権をなく奪し、第二段階では上院の権限と組織の広範囲にわたる包括的改革を行うこととしたのです。

ブレア政権が推進する改革の第一段階は、既に完了しています。一九九九年一月に国会に提出された改革案は、世襲議員が自動的に議席を世襲することや投票権を持つことを改める提案をしたものでした。原案では世襲議員の全議席廃止だったところ、審議の過程で、世襲議員九二人に限って改革の第二段階まで在籍する、という妥協が図られて成立しました。その結果、七五〇人ほどいた世襲議員は、九二人を除き、すべて上院を去ったのです。

改革の第二段階として、政府は、一九九九年二月にロイヤル・コミッションを任命しました。これは、第二院の役割と機能、どのように編成されるべきかを検討する機関です。ロイヤル・コミッションは二〇〇〇年一月には「上院の将来像」という報告書を発表しました。この報告書では、世襲貴族議員を廃止するとともに、任命議員と直接選挙で選ばれた議員で上院を構成するという案が出されました。その後、二〇〇三年二月に、保守・労働両党の合同委員会の提案に基づき、両院において議員の考え方の方向性を探るために、七案併記の改革案に対する採決が行われました。その結果、有効な結論が出ず、結局法案提出には至りませんでした。その後、しばらくは目立った動きはありません。

ませんでした。二〇〇六年に入り、上院におけるテロ法案否決等を契機に上院改革議論が再燃し、一月の女王演説で法制化への意図が表明され、今回の白書へつながっているのです。

今回の白書について

今回発表された白書では、これまでの任命制・世襲制混合型に代わり、一部直接選挙制を導入した、任命制・直接選挙制混合型の構成が提言されています。また、これまで任期のなかった上院議員ですが、任命制で選ばれる議員を含め、全上院議員の任期を一五年とする、としています。

そのほかにも、発表当時の七四六議席から五四〇議席への議席数削減、世襲貴族議員を将来的に全廃すること等、大胆な改革案が提言されています。(ただし、大主教など聖職貴族の議席は維持)

これらの改革に伴い、現在、直訳すると「貴族院」となっている名称の変更も提案されています。

改革の鍵となる、直接選挙で選ぶ議員の割合については、複数案の併記に留められています。白書の発表に当たって、改革を担当するストロー下院院内総務は「個人的には五〇%が現実的な案だと思う」と述べました。さらに、同氏は「これは、今の世に合った、より正当かつ効果的に国民の声を代表するような上院を作るまたとないチャン

今後の動き

政府は、今回の白書の提言に基づき、与野党との調整を行い、最終的な法案化作業を行う予定です。

二〇〇七年三月初旬現在で、下院において選出議員の割合を決めるための投票が行われ、全議員を選挙で選ぶという案が多の票を集めたところです。この後上院でも同様の投票が行われる予定ですが、上院では改革に反対する勢力の抵抗も予想され、先行きは不透明です。本稿が皆さんの目に触れるころには、今回の白書での提言に対して、一定の方向性が打ち出されているかもしれません。

世界最古といわれ、日本の議会制度の手本ともなったイギリスの議会制度が大きな曲がり角を迎えようとしています。その改革の動きは今後も目が離せません。

〈参考〉

・川勝平太・三好陽「イギリスの政治」(早稲田大学出版部、一九九九年)

・岩波祐子「二院制改革の動向」(英独伊の最新事情)「立法と調査」No.263、二〇〇七年一月

・菊川智文「イギリス政治はおもしろい」(PHP研究所、二〇〇四年)

・竹下譲・横田光雄・福沢克祐・松井真理子「イギリスの政治行政システム」(ぎょうせい、二〇〇四年)

・イギリス大使館ホームページ <http://www.uknow.or.jp/be>

・イギリス議会ホームページ <http://www.parliament.uk/>

・BBCホームページ <http://news.bbc.co.uk/>

海外生活
だより

ロンドン事務所

イギリスから
花だより

ロンドン事務所所長補佐

角南

和子(岡山県派遣)

はじめに

イギリスには、都会でも公園がたくさんあります。ロンドンでいえば、ハイド・パークをはじめ、リージェンツ・パーク、ハムステッド・ヒースなどたくさん緑があるだけではなく、建物の周辺にも狭いながらガーデンがあるなど、普段の生活に花や緑が欠かせないものになっています。

今回は、花や緑を愛するイギリスでのお花事情などについて、ご紹介します。

お花事情

ロンドンに暮らし始めてまず気付いたことは、地下鉄の駅の近くなどには必ずといっていいほど、花のストール(屋台)を見かけ

ることです。そこで気軽に花を選んで、そのまま家に帰ってお花を生ける人もいるし、ちよつとしたプレゼント用に花束にしてもらう人もいます。もちろん、日本にあるようなフラワーショップもあります。また、テスコ、セインズベリーといったスーパーでも必ず簡単な花束が約二ポンド(約四五〇円)で買えます。しかし、フラワーショップよりも花の種類も豊富で求めやすいように思います。

日本でも最近では、男性が花束を持っている姿を見かけるようになった気がしますが、こちらでは、男性が普



↑フラワーアレンジメントの花材を買うために、よく利用するストール

通に家族や友人の誕生日プレゼント用にお花を買って歩いている姿をよく見かけます。また、特別なイベント、例えば、クリスマス

の時期には、ストールにも、クリスマスリースが並べられていました。また、バレンタインデーのころには、ハート型の飾りが入った花束がありました。

フラワーアレンジメント

1 フラワーアレンジメントとの出会い

このように日々、お花、そして緑、自然を愛するイギリスに來たので、イギリスらしいことを何か一つ学びたいと思っていたところ、当事務所のスタッフを通じて、フラワーアレンジメント教室を主宰しているイギリス在住の日本人の方に出会い、私のフラワーアレンジメント教室通いが始まりました。

この日本人の先生は、イギリスのカレッジでも教えているということで、実際に教室に参加したところ、日本人だけではなくイギリス人も参加しており、英語と日本語の両方で教えていました。私自身にとっては、フラワーアレンジメントを学ぶとともに、英語も学習することができ、一石二鳥です。

2 教室の雰囲気

さて、毎週一回開催している教室では、最初に先生のデモンストレーションとアレンジについての理論に関する講義があり、その後、実際に各自準備した花材を用いて、お花をアレンジしていきます。当初、日本

の華道教室と同じように、自分の花を生けたら、先生に作品を見てもらい、花を片付けて帰るものと思っていました。ところが、この教室では、全員の作品が完成したのを待つてから、順番に各自、自分の作品についてセルフ・アセスメント(作品のテーマ、色彩、スタイルなど)を行い、その後、先生から指導を受けるスタイルでやっています。そのため、教室がある日は帰宅が大変遅くなり、とても疲れるのですが、仕事とは違うことをするため、不思議なことに頭がリフレッシュされる気がします。参加するたびに、先生も生徒も本当に熱心だと感心しています。また、日本の教室では、自分の作品を完成させることに集中していましたが、この教室では、お互いに自分の作品について、先生はもちろん、隣の参加者とも相談しながら作品を作っており、和気あいあいとしたアットホームな雰囲気です。

それから、この教室は教会の敷地内にある建物で開催されており、一階は私たちのフラワーアレンジメントの教室、二階はサルサの教室が行われており、時にサルサの音楽とダンスの音でアレンジに集中できないことも多々あります。イギリスでは、教会がコミュニティハウスのような役割



↑フラワーアレンジメント教室の様子

もしているようです。

3 教室参加後のエピソード

教室終了後、完成した作品をそのまま持つて帰ることになります。私は地下鉄に乗って帰るので、いつも乗客からとても注目を浴びることになり、恥ずかしい思いをしています。しかし、時々お花好きの女性から、「このお花はとてもきれいだけど、自分で作ったの?」とか、「どこで習っているの?」など聞かれると、ちょっとうれしくなります。そして、フラワーアレンジメント教室の場所や作品について話をしていると、日々の疲れが癒される気がします。

フラワーアレンジメント教室に通い始めてから、いつも歩いている道でも、何かいい花材がないか、あるいはストールや花屋さんのそばを通ると、どのように花を生けているのか観察してしまうようになりました。アパートの近くにリージェンツ・パークという大きい公園がありますが、はさみを持って出かけていき、いい葉物があれば切つてこようかという衝動にかられて困っています。(まだしていませんので、ご安心ください)

花にまつわるイベント

花、そして緑を愛するイギリスには、花にまつわるイベントもたくさんあります。その中で有名なものは、やはり王立園芸協会(RHS)主催のチェルシー・フラワー・ショーでしょう。きつと、読者の皆さんもご存知の方が多いと思います。

と思います。

このフラワー・ショーは、世界最古で最大のガーデンングの祭典で、毎年エリザベス女王が参列する大イベントです。常に新しい庭のトレンドを生み出していることから、人々の注目度も高く、イギリスの新しいガーデンング事情を知りたい方にはお勧めです。ただ、実際には、完全予約制の前売りのみで、チケットを入手することは難しいようです。



↑チェルシー・フラワー・ショーをご訪問中のエリザベス女王(www.picselect.com/ Photo by Michael Walter/Troika)

そのほか、ロンドン周辺では、ハンプトン・コート・パレスやウィズリー・ガーデンでもRHS主催のフラワー・ショーが開催されています。また、イギリス各地では、一般家庭の庭にも素晴らしい庭がたくさんあり、期間限定で個人の庭が公開されています。そうした庭のガイドブックである「イエロー・ブック」を手にガーデン巡りも楽しそうですね。

もし、イギリスに来ることを考えているなら、五〜七月にかけての緑豊かな季節に、ガーデン巡りはいかがでしょう。また、短い滞在期間であっても、ちょっとストールに立ち寄りお花を買うなど、花と緑を愛するイギリスを少しでも満喫していただけたいと思います。